

「平家物語を語り継ぐ」公演報告

花柳 衛菊 2019年8月

2019年6月30日の夕刻、ほんの少し涼し気なパリに着き、翌日から、20日の出発前日まで、息つく暇もなく3か所での計15回の公演に邁進し、7月22日午後、羽田国際空港に降り立った。まだ梅雨が明けきらない東京は、蒸気の充満したお風呂場に飛び込んだような息苦しきだ。湿度が高いとはこういう事か。さらっとしたフランスの気候は、暑くても日陰や家の中に入るだけで涼やかな気分を味わえる。パリのエスパス・カルチュラル・ベルタンポワレ劇場7月2日公演を終えて出発する時、アヴィニョンは45度だ、酷暑だよと言われ、戦々恐々としてアヴィニョンに乗り込んだが、日の当たるアスファルトの上を歩かない限り、毎年、宿と稽古場として借りている空調のない石壁のヨガ道場でかなり快適に過ごすことができた。しかし、湿度の低いアヴィニョンでは知らず知らず体から水分が抜けていく。気化熱で体は冷やされ快調だが水分補給を怠るととんでもないことになる。その点、天然果汁100%のどろりとした洋なし、オレンジ、すもも、キウイ、マスカット、なんとザクロ！等あらゆる果物のジュースが安価で買え、のどを潤してくれる。1年に1度、この濃厚天然果汁を、朝に夕に、公演終了帰宅後の熱暑からの解放時に、思う存分飲む生活を楽しみにしている。

○パリ公演

アヴィニョン・フェスティバル・オフ参加2週間連続公演は今年で19回目である。過去のブルゴーニュ3都市、エスパス・カルチュラル・ベルタンポワレ劇場、メラルグ市ジャパンマニア公演を数えると22回目のフランス公演である。22回目のフランスと言っても、長年の渡仏だからこその様々な出来事があった。続けることは、旅公演の濃密さを増すために必要であるらしい。今年はツアーと言ってもいい、3か所での公演となった。

まずは、パリのど真ん中、セーヌ川沿いのシャトレ駅の真上にある、ベルタンポワレ劇場。2014年以来2度目の公演になる。地下倉庫を改良した重厚な石壁の、優秀なスタッフのマーゴさんがいるキャパ40名程の小さな地下劇場だ。1年を通じて、日本文化を紹介する主催公演をしている。今年は我々の他に三味線やオカリナのコンサートや地唄舞、舞踏公演などがある。アヴィニョンに入る前に公演をしませんか、とのプロデューサー



パリの地下劇場
薩摩琵琶奏者 坂さんと

大谷さんの問いかけに、是非と応じた。小さいが、客席が階段状でとても見やすく、私達

の3泊の宿泊も付き、宣伝活動もしてくれスタッフもついて、チケット売り上げの70%を頂ける。アヴィニョンではチラシ配りまですなければならぬ自主公演の身には大変有難い。照明も音響も一人で手掛けるマーゴさんの理解力は早く、しかも助言も的確で、最初の坂麗水さんの琵琶演奏「祇園精舎」を、斜めからあてた照明が作り出す坂さんの影のみで聞かせる効果を美しく作りだしてくれた。まるでこれから始まるのは、影のように形のない世界だ、と表現してくれているようだ。今回の公演「平家物語を語り継ぐ」は平家物語を今に繋げ



パリ公演終了後。着物姿の背が高い方が黒井先生、右から2番目が道子さん

た、書、音色、庶民、琵琶法師 等を題材にしたもので、薩摩琵琶と福原道子さんの能管、篠笛の音楽3題、舞踊3題の1時間公演である。

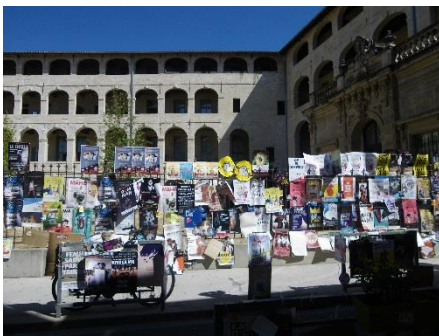
小さな劇場ながら満席で、ブラボーをもらってパリ公演は無事終了した。サー、次はアヴィニョンである。

翌日、タクシーで新幹線 TGV が発車するガレドリヨンパリ駅に着いたのだが、私のよく知っているガレドリヨン駅ではない。いったいここはどこ？ どうも駅の地下らしい。私の頭には駅の地上部分しかない。ホームはどこどこ？ と必死で聞きまわっても、電光掲示板を見ろ、としか教えてくれない。掲示板には Hall3 と表示されているだけだ。でもだだっ広い Hall3 にはホームが見えない入り口が 5 つ程並び、どれもブロックされていて入る事はできない。掲示板を見ていてもどの列車にもホーム番号は表示されず Hall 番号のみが示されているだけだ。発車時刻は刻々と近づいている。どうしたら？ 乗れなかった場合、後続列車の当日高額チケットを 3 人分買わなければならない、アヴィニョンで手配しているタクシーにどうやって連絡したらいい？ パニックになる直前、発車 15 分ほど前に突然、大きな掲示板ではなく、一つの入り口の掲示板に、私たちの乗るマルセイユ行 11:37 発の列車が表示された。頭をぐるぐる廻る恐怖から突然解放された。フランスの鉄道システムを知れば何でもない事だったのかもしれない。アヴィニョンでも TGV に乗る時、たった 2 つのホームしかないホーム番号を、皆、電光掲示板で確認をする。マルセイユに行く下り列車用のホームに、パリへ行く登り列車が来ることがあるのだろうか。でも人々はホーム番号が表示されるまで掲示板の前を離れない。そしてガレドリヨン TGV ではホーム番号は表示されず Hall のみが表示される不親切さだ。

帰国前日、日本庭園野外公演が行われるモンティニに行く国鉄で、メモを見せて買った往復チケットにもかかわらず、チケットの行き先が違くと一人 35€ の罰金を取られる初体験をした。抗議するべきだったと後から助言をもらったが、モンティニ到着直前の絶妙なタイミングで徴集された。ガレドリヨン地下ホームの恐怖と、モンティニ罰金と「地球の歩き方」に報告したいほどの 2 度の苦い鉄道経験であった。

○アヴィニョン・フェスティバル・オフ参加公演

3 人で 7 つもの大きな荷物を抱え、兎に角アヴィニョンに着いた。いつも迎えに来てくれるマミータクシーの陽気なママの大きな胸に抱きつかれ、難関を乗り越えて無事着いたことに心から安堵した。



我が家の前のポスターだらけの堀

南仏のアヴィニョン旧市街で毎年開かれる、アヴィニョン・フェスティバルは世界有数の舞台芸術祭である。演劇祭主催公演のインと個人参加のオフに分かれ、イン公演（今年は 45）は会場も広く、常にほぼ満席でチケット購入が難しい。そんな選ばれたイン公演を是非見たいと、毎年開演 2 時間前から勇んで並び、チケットを購入するのであるが、公演終了後、毎年の事だが、今年もがっかりして会場を後にした。ち密な稽古や計算なしに構成だけで舞台に立ち、即興に任せたという感じであろうか。布を客席にかぶせたり、観客に歌わせたものを録音しそれを重ねて音楽？ にしたり、藁のような長い植物を、全裸のウエストに巻いた紐に刺しながら英語の歌を歌っ

たり。一応ダンス公演となっているが、200 人程の観客の 10 名程が途中でバタバタと退散した。今回最初にそのイン公演を見て、その後、2 時間のチケット買いのロスタイムをイン公演のために費やす気にはなれなくなった。



路上パフォーマーと

何といてもフェスティバルの主流は、町中の小さな空間で行われる個人参加のオフ公演である。参加団体はなんと今年は 2000 近い。演劇、ダンス、音楽、人形劇、マイム、サーカス…、あらゆる分野の舞台芸術が並ぶ。しかし、中国 10、香港 4、台湾 4、日本は展示 1 舞踊 1 の 2 組と東アジアからの参加団体は少なく、日本からの舞台公演は私だけという寂しさである。このような遠隔地での公演には、どこからも援助が得られず、渡航滞在費、公演総費用を自費で賄うことはやはり海外フェスティバル参加 24 回目の私にも難しい。しかし、そのような費用の工面を無理してでも、ここには世界一、二の演劇祭としての魅力がある。何しろ 2000 近い公演全てがプロフェッショナルのオリジナルで、演者達が皆、必死で舞台に立っているからだ。これだけの公演が集まると、超絶技巧の天才

たちも集まる。こちらのフランス人の公演のすごさは、息つく暇もなく演じ、お客を沸かせ、巻き込み、自身も汗みどろで、その熱気がストレートに出てくることだ。そんな、切磋琢磨から天才は生まれる。大汗をかきながら自分の声の擬音で演じるパントマイム、何十曲をつなげたメドレーを延々と繋ぎ続ける 4 人のミュージック。足の刻むリズムがウルトラ級のフラメンコ。どうしたってかなわない。彼らと肩を並べて演じることの厳しさを毎年体感している。そして、そんな人々と競演するために何が必要か考え続ける。しかし、私のような超絶技巧がない公演にも人々は集まってくる。その答えを自転車でわざわざ告げに来てくれた男性がいた。「言葉のない静けさの中に何かの高尚さを感じる。フランス人の公



公演宣伝活動

演にはないものだ。これからも続けて欲しい。」自分が模索し続けてきたことが認められたようで非常に嬉しく、その言葉をもらうために渡仏 22 回を費やした気がした。フランス語を話せる坂さんの御蔭でもある。

アヴィニョン橋の直ぐわき、メルキユールホテルの会議室に黒幕を張って、照明を設えたガレージインターナショナルシアターで午後 1 時開演、1 時間の自分の公演を続ける。公演終了、片づけ後の 5 時頃から毎日、町を歩き回り、劇場荒らしをするのであるが、ことしは 2 つのオフ公演が私の心をとらえた。出色は何と言っても台湾文化庁が送り込んできた若い 8 名のコンテンポラリーダンス公演である。ダンス専門の **Hivernales** イヴェルナル劇場で、アヴィニョン滞在最終日に見た。最初に会場に入った時、すでに白いリノリウムの床に一人の女性があおむけに両手を広げて横たわっていた。5 分程して暗転。再び照明が入りダンスが始まる。後から加わった 7 名が彼女をもてあそんでいく。ソロ、デュオ、トリオ、また、全員で踊り、時には彼女を持ち上げては降ろしたり。一瞬の隙もなく完璧に計算されたカウントが支配する世界だ。そして、ダンスが進んでいくうちに、彼女が大衆から孤立していくことが感じられて、私は、大勢の中にいる時の孤独を表しているのだと思った。小さな心の傷をダンスで過大に表現していると思い、ささやかな心のわだかまりをこんなに壮大なダンスにしたのかと思った。男性は T シャツにジーンズ、女性はデザインされた簡素なワンピースだが清潔で汗の臭いがしない。ち密な振付、体を最大限に使った無駄のない動き、その美しさと清潔感が実に東洋的だ。最後に再び彼女は最初の形で床に横たわり、人々は去っていく。題名はわからず、仲間からあぶれた孤独感、だと思いこんでいた。後から題名を見た。『Rage 激怒』。私の解釈の浅はかさに

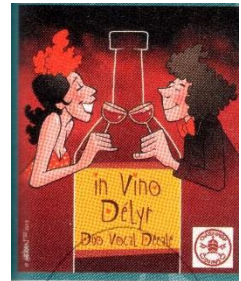


公演終了後、お客様と

間からあぶれた孤独感、だと思いこんでいた。後から題名を見た。『Rage 激怒』。私の解釈の浅はかさに

とてもショックを受けた。何という能天気。あー、彼らは祖国のために、祖国を誰にも渡さないために、台湾の現状を国際舞台で訴えるために必死に踊り祈っていたのか。最初と最後の彼女の横たわり方は台湾そのものだったのかもしれない。祖国を自分たちで守る決意、そうとしか考えられない彼らの熱演であった。祖国を背負う、一見平和な日本では考えにくいことだ。彼らは、日々、自分の国を守るためにどうしたらいいか考えている。解決困難な国際情勢が南仏の小さな町アヴィニオンで訴えるように『激怒』として重く表現されていた。

もう一つの出色は二人のミュージック『世間の外れ者のデュオ』。男性と女性、多分、私生活もパートナーの二人。女性が男性のギターやピアノの伴奏で次々とソプラノの歌を披露する。ミソは女性がワイン(多分ジュース)から始めたアルコールと思われるものを次々と飲みまくることだ。彼女はどんどん酔って行く。酔いながらも男性の伴奏に合わせて歌い続ける。10名程しかいない観客にもワインを勧める。実は今もって、彼女の酔いっぷりがあまりにも自然で見事で、実か虚かわからない。本当?演技?まるでぼろが出ない。メイクも頬紅を強くして、ほろ酔い顔である。徐々に酔いは深くなっていくのだが、男性のギターを二人で弾く時も完璧、お客のアンコールに答えてカルメンのアムーを歌う時も美しいソプラノでそつなくこなす。いったい本当に酔っているの、いないの?最後の挨拶もどこか足元がおぼつかない。でも歌は完璧なのである。演技だとしたら、やはりこれは超絶技巧である。が、あまりに自然でお客が気付かない。もし彼女が空のグラスで飲むふりをするだけで酔っばらっていったのなら、絶大な拍手がきただろう。私もブラボーを叫んだに違いない。



外れ者のデュオ

○モンティニ 日本庭園公演

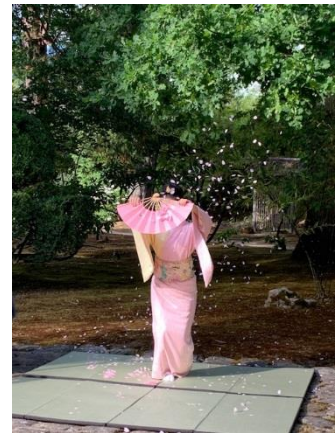
アヴィニオン連続13公演もあと少しの時に、突然メールが入った。パリで活躍する国立コンセルバトワールでも教壇に立つ舞台芸術家・黒井治先生からだ。ベルタン公演に来て下さった折り、パリに19日に行き、2泊すると伝えてある。「フォンテンブローの近く、モンティニにある豪邸の日本庭園で20日に野外公演をしませんか?」という誘いのメールである。黒井先生はいつもアヴィニオンの帰りにミニ公演を主催して、在仏の日本人や日本関連のフランス人を数多く集めて下さる。すぐにOKを出した。



モンティニの庭園

アヴィニオンからパリへ移動した翌日、舞台衣裳をバッグに詰めてパリから国鉄で1時間程のモンティニに着くと、日本庭園の主人、典子さんが車で迎えてくれた。フランス風マダムと思っていた我々の前に登場したのは、何と日に焼けたノーメイクに地味な作務衣を着た、気さくで品のある美しい笑顔の日本女性だった。しばらく会っていなかった従妹が迎えてくれたような暖かさだ。ご主人のアンドレと29年前に結婚をして、有名画家が住んでいたモンティニの邸宅を購入したとか。モンティニは国鉄の駅前から、長い石塀が続く、沿道には花々があしらわれ、店一軒、広告一つなく、緑包まれた古式ゆかしい

高級住宅街である。彼女の豪邸も、どこまで続くか想像がつかない広大な庭に、池のある日本庭園が広がる。池には鯉、その向こうには茶室。庭には大きな木々がそこかしこにそびえ、大木の下は青々とした苔、石を美しく配し小石を敷き詰めた枯山水、竹の塀やつくばい、庭をしばらく歩くとイギリス式庭園、家庭菜園、巨大な鳥籠まである。



畳の上で

庭の石畳の上に敷いた畳 2 畳が今回の舞台だ。6 時開演といえども、まだ日差しは明るく、袴の着物を着ての公演に、暑さに耐えられるかと心配したが、池を越えた風は涼やかで、見上げると大きな檜の木の葉がおおい

かぶさるようにさわさわとなびく。西からの天然の照明にまっすぐに照らされ、無限の彼方から亡き母の視線を感じ、踊りながら何かに包まれる幸福感を味わった。

私はなんという豊かな人生を歩んでいるのだろう。畳を囲むように 40 人程の方々が背筋を伸ばし集中して鑑賞して下さい。皆様に喜んでいただかなければ。

公演後、見に来て下さった方々持参の巻きずしやサラダ、ミニトマト、手作りマカロンを食べ、ワインを飲みながら交流をする。これこそが、渡仏公演 22 回目の成果だと思った。有難かった。

典子さんのブログから

「6 時、着物に着替えたオサムさんの要を得た挨拶解説の後、開幕。（幕はなくとも）演目は平家物語、祇園精舎の鐘の声～ビョヨ～ン、麗水さんの琵琶法師の語りにエギクさんの端正な舞が深い緑から浮かび上がる、淡々と哀れを誘う笛の音に時折つくばいの水音や葉のざわめきが混じる…。厳粛、哀感、琵琶と笛の独奏の間にエギクさんは着物を着替えて、手ぬぐい一本をいろいろな風に操って愛嬌のある仕草で庶民的なスケッチをして見せたり、桜の花びらを散らせて幽玄な世界を誘ったり。扇子ひとつで情感が揺れ、たった 2 枚の畳の地から情景が立ち現れ、遠く見えないところまで広がってゆく。エギクさんの舞の表現に、琵琶や笛の音と奏者の凜とした佇まいに、西洋とは違う何かに、見る人みんな注意を凝らした。最後の演目で心配だった強い西日が差し込んだがそれがまるで意図的なスポットライトのように花びらをきらめかしエギクさんのうっとりするような表情を照らし出した。見事だった。」



日本庭園の茶室にて

「平家物語を語り継ぐ」2019 年夏、フランス公演

序章	「祇園精舎」	薩摩琵琶：坂 麗水
書き留める	「書」	舞踊：花柳 衛菊
奏でる	「竹の唄」「神楽」	篠笛、能管：福原 道子
語り継ぐ	「手ぬぐい」	舞踊：花柳 衛菊
	「徳子」	舞踊：花柳 衛菊 薩摩琵琶：坂 麗水 笛：福原 道子